ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学　所属：国際看護学部　名前：記村 聡子　作成日：2026 年 1 月 30 日

１．教育の責任

国際看護学部の教育理念を実現するために、教員として私は、学生一人ひとりの学びを誠実に支え、看護師に求められる知識・技術・態度を適切かつ確実に指導する職責を担っている。また、学生が国際的視野を広げ、多文化理解を深められるような学習環境を整備するとともに、安心して主体的に学習へ取り組めるよう、教育内容および教育方法の改善に継続的に取り組んでいる。そのため、自らの専門的能力と教育実践力の向上に努め、教育者としての責務を誠実に果たしてく所存である。

２．教育の理念

私は、看護専門職として社会に貢献できる人材を育成することを教育の根幹に据えている。急速に変化する医療・看護の現場においては、多様な価値観を尊重し、状況を的確に判断しながら責任ある行動を取る力が求められている。また、地域社会のみならず世界が抱える健康課題に向き合うためには、国際的な視野と倫理観を備えた看護師を育成することが重要であり、これを教育理念として掲げている。

こうした理念を実現するために、学生が多様な体験を通して多文化理解を深め、主体的な学びと対話を通して他者に寄り添う姿勢を育めるよう支援している。また、学生一人ひとりの強みを引き出し、知識・技術・態度を統合して学べる教育環境の構築に努めている。さらに、継続する学びが看護専門職としての成長に不可欠であるとの考えから、学生が自ら学び続ける力を養えるよう力を注いでいる。

３．教育の方法

【4 年間を通じた教育】

<u>地域・在宅看護関連科目</u>

2 年次の「地域・在宅看護学概論」では、在宅看護の対象者およびその家族の理解を深めるとともに、保健・医療・福祉制度に基づいた在宅ケアプランについて学べるよう指導している。

3 年次の「多様性と地域・在宅看護」では、コミュニティの概念を理解するとともに、日本および海外の文化的背景を踏まえた暮らしとコミュニティの特徴について学修できるよう教授している。

続く 3 年次秋学期および 4 年次開講の「地域・在宅看護援助論Ⅰ・Ⅱ」では、看護師が対象者の生活空間で実践する看護について理解を深め、臨地での判断力を養うことを目的に指導を行っている。

これらを踏まえた「地域・在宅看護学実習」では、訪問看護ステーションや地域包括支援センターなど、地域で暮らす人々を支えるサービスにおいて実習を実施し、人々の暮らしとそれを支える専門職の役割を理解する機会を提供している。

さらに 4 年次「統合実習（地域・在宅）」では、定住外国人の暮らしと支援について学び、文化的背景に応じた看護の視点を統合することを目指している。

<u>地域連携継続看護演習科目</u>

4 年次開講の「地域連携継続看護演習Ⅰ・Ⅱ」では、既習の知識と体験を統合し、地域で生きる人々を支える看護実践力を育成することを目的としている。「地域連携継続看護演習Ⅰ」では、地域に目を向け、その中で個を支援するために必要な資源や、コミュニティ形成を促す資源について考える基礎的な力を身につけるため、フィールドワークを実施している。次年度への改善として、退院支援・指導に関する基礎的な力を養うため、シミュレーション教育も取り入れる。「地域連携継続看護演習Ⅱ」では、各領域で実施される統合実習と連動させ、実習体験の内省を通して、人々の暮らしとそれを支える看護の役割について理解を深めるよう指導している。

<u>看護研究Ⅱ</u>

卒業研究の指導を担当している。特に、研究の基盤となるリサーチクエスチョンの立案について重点を置き、学生が主体的に問いを立て、研究の方向性を明確にできるよう支援している。

【教育の工夫】

初学者である学生にとって、病院で行われる看護の理解が十分でない段階で在宅看護を深く理解することは容易ではない。そのた

め、授業ではメディア教材を積極的に活用し、在宅での看護実践を具体的にイメージしながら学べるよう工夫している。また、事例を用いて対象者および家族に必要なサービスを検討するプロセスを取り入れ、制度や施策を実践的に理解できる学習構造としている。さらに、こうした学習の中でグループワークを効果的に活用することで、多様な視点を共有しながら学びを深めることができるよう支援している。

【教材開発】

在宅看護の事例展開において、近年、訪問看護の現場で増加している「在宅におけるストーマ管理」を取り上げた事例を作成した。この事例は、退院指導・支援の段階から在宅生活、さらにはエンド・オブ・ライフに至るまで、対象者の人生の流れに沿って学べる構成となっている。学生が個の生活背景や価値観を踏まえながら、継続的な支援のあり方を総合的に理解できるよう工夫した学習素材である。

2026 年度に向けて、退院支援・指導を学ぶためのシミュレーション演習の構築を進めている。本演習は 4 年生春学期に実施される科目内で用いるものであり、受講する学生は非常に過密なスケジュールの中で授業および課題に取り組むことが求められる。
そのため、限られた時間の中でも学習効果を最大化できるよう、学習内容のブラッシュアップを行い、退院指導を効果的に理解できる事例の再構成を行っている。加えて、学生が在宅療養の場面を具体的にイメージしながら学習できるよう、教材動画の作成にも取り組んでいる。これらの工夫により、学生が退院支援の全体像を理解し、対象者の生活背景を踏まえた指導・支援のあり方を実践的に習得できる演習環境の整備を目指している。

【実習機関との連携】

看護教育では、臨地での学びを大切にしている。地域・在宅看護学実習では、訪問看護師、社会福祉士、医療ソーシャルワーカーなど、多様な専門職が学生の学びを支えてくださっており、専門職連携の視点からも極めて重要な教育機会となっている。

学生にとって、実習で出会う人々（サービス利用者や家族など）の思いや生活そのものを理解することは、在宅看護を学ぶうえで重要な基盤となる。また、指導者が現場でどのような視点で支援を行い、どのような意図で判断や言動を選択しているのかを理解するためには、指導者自身が語る実践の背景や判断の理由、いわゆる「語り」が非常に大きな意味を持つ。このような学びを確かなものとするため、教員としては指導者との連携を一層強化し、実習尾学習環境が豊かに保たれるよう継続して取り組んでいる。これにより、学生が臨地実習での経験を通して、対象者の暮らしに根差した看護の視点を深め、専門性の統合を図ることができるよう支援している。

４．教育の成果

すべての授業において、学生にはリアクションペーパーの提出を求めている。初回の段階では、授業内容の要点をまとめる記述が中心であったが、回を重ねるにつれ、質問や新たに関心をもった点、これまでの経験を踏まえた考察が深まるなど、記述内容に豊かさが増している学生が多く見られるようになった。この変化は、学習を通して学生が主体的に思考し、自らの学びを振り返る力が育っていることを示す一つの教育的成果であると考えている。

また、講義・演習の場面や臨地実習において、学生同士が活発に意見を交わす姿が多く見られることから、学習環境への満足度は総じて高いと感じている。こうした相互作用は、学生の理解を深めるだけでなく、他者の視点を尊重しながら学びを広げる姿勢の育成にも寄与している。

５．改善への努力と今後の目標

地域・在宅看護学実習の成果からは、対象理解や制度理解に課題が残ることが明らかとなった。また、学生が臨地で得た情報をどのように統合し、臨床判断へとつなげていくのかについて、教授方法の改善が必要であることも示唆された。これらの課題を踏まえ、2026 年度に向けて教育内容と方法の改善を進めている。実習に先立って開講する「地域連携継続看護」では、従来のフィールドワークに加えて、退院指導を対象としたシミュレーション教育を導入した。これにより、学生が臨床判断のプロセスを理解し、その内容を指導や支援に生かす力を養うことを目的としている。さらに、地域・在宅看護学実習においては、学生が個々の事例を丁寧に理解し、経験を深い学びへとつなげられるよう、リフレクションの機会をより意図的に提供する体制へと改善を図った。加えて、実習の目的・目標・方法

についても見直しを行い、学生が実習の意義を理解しながら主体的に学びを進められるよう調整している。

【添付資料】

・　各科目のシラバス
・　開発教材
・　学生アンケート結果